

会議の概要（議事録）

会議の名称	(番号) 1-38	令和6年度第3回 墨田区図書館運営協議会		
開催日時	令和6年6月30日（日） 午前10時から12時まで			
開催場所	墨田区立ひきふね図書館5階会議室			
出席者数	<p>【委員】12名 日向 良和（会長）、今井 福司（副会長）、松塚 智加子、駒田 るみ子 金 豊子、矢島 真理子、齊藤 宮子、正岡 恵子、津村 しづ恵、 森 恵子、口中 常嘉、横井 貴広</p> <p>【事務局】 ひきふね図書館長、ひきふね図書館次長、ひきふね図書館主査、 ひきふね図書館担当職員2名</p>			
会議の公開 （傍聴）	公開(傍聴できる)	部分公開(部分傍聴できる)	傍聴者数	0人
議 事	<p>議事第1 墨田区こども読書活動推進計画（第5次）の策定について （小学生・中学生・高校生期の施策）</p> <p>議事第2 その他</p>			
配 付 資 料	<p>次第</p> <p>資料1 子ども読書活動推進計画施策体系表</p> <p>資料2 事業概要</p> <p>参考資料 基本方針変更点</p>			
会 議 概 要	<p>墨田区こども読書活動推進計画（第5次）の策定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本方針、基本目標の修正につて ・小学生・中学生・高校生期の施策について 			
所 管 課	ひきふね図書館（電話：5655-2350）			

■議事第1 墨田区子ども読書活動推進計画（第5次）の策定について

日向会長

本日は小学生、中高生期の施策がメインとなる。事務局から資料の説明を。

事務局

資料説明（前回の意見を踏まえた基本方針・基本目標の修正箇所、小学生期・中学生期の施策の体系の資料について説明）。

日向会長

前回の協議会での議論を基にして、基本方針、基本目標の文言について、整理していただいた。基本的にはこれで問題ないと思われるが、意見があればお願いしたい。

駒田委員

基本方針はこれでよいと思うが、基本目標2について、「出会えて」「読めて」と可能動詞が使用されている。公文書では「出会うことができる」、「読むことができる」と表記することになる。どちらが良いかということではなく、「出会い」、「読んでいる」という表現でも良いのではないかと考える。目標を達成するためのポイントの基本目標3「ほんを読んでもらう」という表現について、ひらがなで開いた標記に意味はあるか。

また、「本の楽しさを伝える」という表現において、「本」ではなく「読書」という表現でも良いかと思う。また「共感」についても、「味わう」よりも「共感し」の表現が適切であると思う。

日向会長

読書活動推進計画であり、計画の趣旨を踏まえると「本」ではなく「読書」という表現でも良いかもしれない。引き続き文言の整理を検討いただきたい。

次に小学生・中高生の施策の議論に入る。概ね18歳までの対象となる。

基本目標1から見ていく ポイントはスローガンのようなものであり、その下に具体的な事業がぶら下がるという体系となっている。

個別具体的なサービスではなく、全体としての意見をいただきたい。

なお、細々としたサービスを列記するのではなく、ある程度まとめたうえで、手段ではなく目的を表記する形が施策体系としては望ましい。事業を細かく列記すると体系表が厚くなり、複雑で見づらくもなる。ブックトークやアニメーションなどは、「本を紹介する」とまとめるべきである。

ポイントの文言等についても意見をいただきたい。

区が進めるものという視点で、また6年後も見越した意見をいただきたい。いま流行の事業も5年後には陳腐化している可能性もある。

松塚委員

図書館の取り組みにおける、事業番号1108について「パスファインダーの作成と活用」という事業内容がわからない。

事業番号1201について、定期的な読み聞かせは小学6年生までやっている。中高生もやっているのではないか。

事業の矢印が小学校の低学年で止まっているので、高学年まで伸ばすべきである。

事務局

パスファインダーとはテーマに沿って調べるためのガイドであり、図書館職員が作成している。各テーマに関係した本やホームページを紹介するものであり、第4次計画では100テーマまで作成予定である。このパスファインダーを、より児童・生徒に活用してもらうべくPR等を行っていく事業であり、調べる学習の一環でも活用していただきたい。

その他にも「アニメーション」「ストーリーテリング」等の専門的な用語は使わないようにして、子どもたちでもわかる計画にしていきたい。

日向会長

図書館専門用語が多々使用されている。整理して一般的な言葉に置き換えたほうが良い。また、事業番号1201読み聞かせや事業番号1206お話会等の事業の実施対象は中高生も対象にしたほうが良いと思うが、検討していただきたい。

駒田委員

中学校でも読み聞かせを行っている。また、読み聞かせをする側にもなっている。職場体験や学童において読み聞かせを行っている。また、お話会も読書マラソンも実施している。おそらく、高校でも読書マラソンやっているのではないかと思われる。

日向会長

高校生まで読み聞かせの機会が得られるという意味で矢印の標記を伸ばしても良いと思う。大人に対して絵本の読み聞かせを行っているところもある。

正岡委員

アニメーションに関連して、私も子どもへの読書への関心の取り組みを調べたことがある。ペア読書、味見読書、ビブリオバトル、回し読み新聞、アニメーション、本探しゲームなど、総称して本に親しむ遊び・ゲームがあることがわかった。いまでもそのような本に親しむ遊びをやっているのか。様々な取組があるが、墨田区はどれくらい実践しているのか。

事務局

小学校高学年以上のいわゆるティーンズを対象とした、かるた・百人一首の講座の実施を行うところであり、現在募集しているところである。この講座もゲーム感覚で行っていきたいと考えている。また、墨田区にまつわる問題を子どもたちに作ってもらい、そのカードを利用したすごろく等も行っている。

矢島委員

私はブックトークを実施しているが、図書館でもブックトークの講座を読み聞かせボランティアの上級講座として実施していただいている。講座の講師として児玉先生に来ていただいております。アニメーションについて興味があるので個人的に質問をさせていただいたことがあるが、本来、アニメーションは一つの本を皆で読み込み、共有できてこそ成り立つものであると教えていただいた。ブックトークを実施している私達でも、アニメーションは難しい。私達もアニメーション取り入れたいが、入門書を読んでもブックトークに絡めて実施するのは難しい。クイズ形式などで、アニメーションの真似事はできるが、アニメーションの指導ができてい学校があるならば教えてほしい。ブックトークの会としても勉強させて

いただきたい。

津村委員

学校現場の支援員として学校のアニメーションについてですが、子どもたち全員が教科書で読んだ話であるなら、できる先生もいる。ただ、図書の先生と私と図書館司書でビブリオバトルも行ったが、先生方は忙しく難しいことが多い。先生方は忙しく、やりたい、やったほうが良いと思っけていても、新たな事を行う余裕がない場合が多い。調べる学習の相談員もやっているが、先生方に説明に行く旨伝えても、あまり機会をいただけないこともあり、学校によっても差が出てしまう。学校の依頼により実施する事業も多いが、実施者は举手制であることが多く実際に事業を PR し、依頼が来たとしてもどこまでできるのかが気になるところである。

口中委員

パスファインダーはとてもいい取組であるが、利用者に存在が分かるようになっているか。また、「ビブリオバトル」という言葉が事業になかに掲載されていないが、これはどのように考えているのか。前回にも質問させていただいたが、子ども司書についてもぜひ取り組んでほしい。

日向会長

計画に記載する事業には個別具体的な取組名称は入れないほうが良い。『様々な本の紹介』といった程度の表現に留め、「アニメーション」、「ビブリオバトル」という単語は事業の説明の中で目的を達成する手段の例示として触れるほうが良い。手段が前面に出ると、5年間その手段を実施することが目的となってしまう、5年間で時代遅れの事業になってしまっても、やり続けざるを得なくなることもある。あくまで、計画にはまとめた形式で記載すべきである。

事務局

子ども司書は基本目標 3 に掲載している。子ども司書の目的は学校や地域とのつながりである。

駒田委員

かつてアニメーションの勉強をしたことがある。近所の子ども向けに行ったり、区中研で取り上げたりしたこともある。ただ、アニメーションに飛びついてくる時期もあるし、そうでもない時期もある

ビブリオバトルも指導室の施策の1つで、「やらなければいけない」という位置づけであり、各校で実施している。私としてはビブリオバトルよりも、そのあとの交流会のほうが大事であり、重きを置きたいと思っている。ただ、今後もどうなるかはわからないため、具体名として計画に掲載はしなくても良いとは思っている。

なお、ブックトークは国語の教科書に言葉も出ているので学校では確実に実施している。区中研の図書館部として行っている取組として、都内の学校や海外の日本人学校等も含めて ZOOM で広範囲のブックトークも行っている。テーマは SDGs であり、『図書館から SDGs』ということで行っている。「ブックトーク」という言葉は、「ビブリオバトル」よりも意味が広く、広義では包含するものでもあると思う。「ブックトーク」という言葉は計

画に掲載してほしいと考える。

日向会長

基本目標 2・3 にも話が及んできているため、基本目標 2・3 についても併せて意見をいただきたい。

事業番号 3112「POP コンテスト」は具体的すぎるので、ビブリオバトル、ブックトーク等も含めて「本を紹介するイベント」のようにまとめたほうが良い。また、「ストーリーテリング」という言葉も入っているが、実際やるのは難しいのではないかと思う。

松塚委員

基本目標 1 について「子どもが好きな本に出会えて」とあるが、成果指標の「本を読むのが好きという回答の割合」と合っていないように思える。また指標 2 は、保育園の保護者の回答率を指標としているが、施策の指標として保育園の保護者のみに限定するのはいかなものか。

日向会長

確かに「子どもが好きな本に出会えて」という表現は少しいかなものかとも思える。出会った時には好きかどうかは分からないはず。ここは単に「本に出会えて」でも良いかもしれない。目的は出会う機会の創出であり、そのあと好きになってもらうという話である。また、「本が好き」と「読書が好き」は違うのではないか。いろんな本に出会う中で、好きな本に出会うという意味合いであることは理解できる。難しいが適切な表現を検討していただきたい。

駒田委員

同じく基本目標 3 で「好きな人から」ということばも気になる。

日向会長

特に「好きな人」と限定しなくても良いかもしれない。

今井副会長

もともと「家族」等の言葉を置き換えたため。このような表現になったのでは。

日向会長

いずれにせよ、もう少し文章を練ったほうが良い。成果指標を保育園保護者に限定した理由は、アンケートの取得の容易さからか。

事務局

任意のアンケートへの協力の取りつけやすさとして、公立保育園を選んだ。私立や幼稚園に対しては、任意のアンケートへの協力が難しい側面があった。

日向会長

本当は施設限定せず、単に回答者＝保護者としていたところだが、なかなか取得が難しいことは理解できる。

齊藤委員

5年後を見据えた大きな目標として、学校司書を「常設」としたほうが良い。学校司書が専門職として、学校図書館に常にいる状態が好ましいと思う。子どもの読書を考えると、5年後にはそういう状態になってほしい。区の姿勢として、大きな目標を掲げてもらいた

い。

また、併せて学校の先生方に、学校司書の活用の講習が必要であるとする。学校司書の活用の仕方を知らない先生も多く、学校司書に任せられることができる業務も自分で言い、より忙しくなっている先生もいる。先生・学校によって温度差もあるので、図書館から先生への積極的なアプローチが必要である。先生方も全部自分で抱え込まずに、学校司書と連携して、より仕事を身軽にしてもらいたい。5年後を見据えて本腰を入れていただきたい部分である。

横井委員

読書計画の事業としてソフト事業もハード事業もある中で、5年後を見据えて、一体何を実行すれば、計画目標を達成するかを考えることは大変難しい。自分の子どもが、学校で図書委員をやっているが、他の児童が読書をするために何が必要かを聞いてみた。やはり、学校司書にいてほしいとあった。また、検索タブレットなど、環境充実に対する希望もあった。また、低学年と高学年でニーズも違い、高学年になると図書館に来ない。どのようにすれば高学年がくるか図書委員としても困っているとのことだった。本計画で基本目標を掲げてはいるが、どうすれば、この目標が達成できるか考えてほしい。その中で事業番号 1301「子どもへの読み聞かせ」から、継続する形で事業番号 1304「短時間でも継続して本を読む時間の提供・アドバイス」の事業名につながっている。この事業番号 1304 は本の読み聞かせの発展形としているような記載であるが、単体の事業であっても良いと思う。

日向会長

読書を推進する人の拡充という施策はどこかにあるか。事業番号 2203 図書担当者の選任に含まれるのか。書き方は難しいとは思いますが、計画としては常勤化をめざす等、具体的に目標として書いても良いとは思いますが。内部環境の充実に関するものであるので推進計画に掲載するかどうかは別かもしれないが、検討していただきたい。ちなみに、学校司書は1校1人の体制ではないのか。

事務局

小学校は委託をしている関係で、1人で複数校持つ人もいますが、大体専任の司書が行っている。中学校は週に2回、ひきふね図書館の会計年度職員が出向いていくが、どうしても片手間の業務になってしまうことが課題である。また、学校司書への研修も費用の問題、人材の問題で課題である。ただ、学校図書館の館長は校長であり、あくまで公立図書館は「支援」の立場であり、すみわけが大事である。学校図書館は専門教育でもあり、各校の特色も出す必要がある。あくまで司書の配置は学校図書館の支援の位置づけであるので、司書の配置については教育委員会全体で議論していく必要があり、図書館単体で結論を出していくことはなかなか難しい問題である。

駒田委員

現在、来年度の予算要望をまとめている。中学校は司書配置の1日増を要望してきたが達成されていない。学校において、教職員は建前上昼休みがあるが、実際は取れていない。昼休み図書館を開ける場合は副担任が行うことになるが、図書委員にお願いする場合でも、

貸出返却等の業務が回せない状態である。お話しなどの実施も難しく、図書館司書が来ないと図書館を開けても回らないというのが現状であり、週2回でも来ていただけていることが本当にありがたいが、でもやはり2回では厳しいと感じている。校長会でも予算上の要望は出しているが、少し諦めてしまっている雰囲気もあり、学校側にとっても反省点でもある。

日向会長

学校司書は学校の先生と図書館の仲立ちとして重要である。本腰を入れて確保するというのであれば、具体的に拡充という方向性を打ち出したほうが行政内部の予算等のことも考えると良いのではないかと思う。

松塚委員

小学校も委託でTRCの司書が大変よくやってくれている。やはり学校としては毎日来てほしい。区として、教育委員会としての計画でもあるので、ぜひ教育委員会内で調整していただき、ぜひ拡充の方向性をうちだして、学校への後押しをしていただけると大変ありがたい。

日向会長

もう一つ、小学生にとって学校司書は同じ人が来るということも大事である。子どもは人を見ているので、いつも同じ人がいるという環境を作っていただきたい。事業番号2109に学校司書の「配置」とはあるが、配置という言葉では、1日でも配置すれば事業の目的として達成となる。どういう表現にするかは大変難しいが、ここは「拡充」という言葉の掲載も含めて検討をしていただきたい。拡充と書いてしまうことが、予算のコンセンサス等で難しい場合もあるかと思うが、当協議会としては、拡充を区に提言したいと考える。

事務局

この問題は教育委員会として重要な課題である。再度教育長も含めて、組織全体で話し合ってみたいので、少しお時間をいただきたい。

日向会長

学校司書については現状で足りていないということが本会の意見であるので、庁内にもお伝えいただきたい。

正岡委員

先週木曜、産経新聞アンケートにおいて、夏休みがない、少ないほうがいいという親が多いとあった。給食や電気代といった生活の困窮の問題である。アメリカでは自殺するなら図書館に來いと発信している。図書館は様々な情報を発信しており、そういった困窮者のサポートの場でもあるという考え方である。学校司書もそういったサポートの役割もあると思っている。忙しい先生に代わり、本をとおして司書に相談もできる。子どもたちの居場所としても大事である。ひきふね図書館には児童室があるが、他の図書館にも「児童室」の位置づけの場が必要であると思う。居場所を増やさなければいけないという意味でも重要である。

日向会長

子どもの悩みのサポート、居場所については、読書計画の中では位置づけが難しいかも

しれないが区の基本計画や子ども支援計画といった別の計画等でフォローしていく必要はあると思う。

事務局

現在、区の図書館には児童室という位置づけはない。ひきふね図書館はスペース的に児童図書室が設けることができただけである。児童室の確保というハード面を図書館で達成するのは難しいところもある。「こどもまんなか社会」という動きの中で、子ども担当部局と連携がようやく強化されてきている。ハード面についても、区全体で議論していきたいが、今ようやくスタートを切ったという状況でもある。

今井副会長

中高生が「読みたい本がない」という現状の課題がある。事業番号 2301 には家庭での取組として「読みたい本をそろえる」とあるが、図書館としては日常的に行っているサービスとして「リクエスト」等がそれにあたると思う。事業番号 2106 図書館利用案内の一環として、中高生にリクエストの制度の PR が大事である。また、具体的に読みたい本があるがただ在庫がないだけなのか、それとも、そもそも本に興味がないのか区別する必要もあるため、中高生のニーズの把握も、取組として取り入れたほうが良い。

日向会長

子どもたちのニーズの把握・調査はどこかにあったほうが良い。

横井委員

事業番号 3201 の本を介した世代間交流はどのような事業か。最近が多世代交流という言葉もあるが、どういったものを考えているか。

事務局

例としては中学生の学童クラブ等における小学生への読み聞かせや、先輩が後輩に本の紹介を行うなどである。今後も様々な取り組みを行っていききたいが、子どもは大人よりも、他の子どもが読んでいる本の影響も受けやすいという発達段階の特性もあり、子ども同士のつながりを大事にしていききたいという事業である。

横井委員

高齢者等幅広い世代間交流の考えはないのか。

事務局

幅広い世代間の交流も考えていきたい。

日向会長

高齢者福祉施設での読み聞かせなどの取り組みをしている自治体もある。読み聞かせることは、本の読み込みも必要であり、自分へのフィードバックとしても大事である。今後、施策を具体的に形作っていく過程で、幅広い世代との交流を考えて行って欲しい。

松塚委員

事業番号 3209「読書技術」という表現があるが、読書を推進するための技術の向上であり、職員個人の読書能力向上ではないため、この表現はいかがなものか。同様に事業番号 3107 の表現も検討してほしい。

日向会長

「読書推進技術」といった言葉は聞かないが、このニュアンスの良い言葉を考えてほしい。指導や研修といった言葉になるかもしれない。他に施策の過不足といった視点で意見はないか。

矢島委員

事業番号 3106 技法の研修も小学校の途中で切れている。誰を対象とした研修かわからないが、ブックトークは高学年でもやっている。この切り方はどう考えれば良いのか。

日向会長

確かに、この事業の矢印は伸ばしても良いと思う。

正岡委員

基本目標 2 の中高生に対するポイントで「本を読む時間もあっても良い」というのは消極的ではないか。もう少し前向きな文言がよいのではないか。部活もスマホも楽しいが、本も同じくらい楽しいよという前向きなメッセージの方が本の価値を上げるという意味でも良いと思う。

事務局

このメッセージは 2 つの意味があり、自分が自分に言い聞かせるという意味も込めている。前向きなメッセージも検討してみたい。

松塚委員

「図書館にきて」とあるが、図書館だけが読む場所の全てではない。現在、電子書籍もあるので、5 年後を考えると直接図書館に来ることだけが全てではないのでは。

矢島委員

高校生は電子書籍の ID はもらえているのか。自分で取得しないといけないのか。

事務局

カード ID がそのまま電子書籍の ID となる。そのままカード番号で利用してほしい。墨田区の傾向として、中高生は図書館に来てくれているが、勉強のための利用が多く、本を読まないことが多い。来館が貸出につながっていない。せっかく図書館に来るなら、本に触れてほしいという私たちの思いが、このフレーズに込められている。

日向会長

利用はするが貸し出しにつながらないということは、さきほどの読みたい本がないという課題にもつながっているかもしれない。

矢島委員

子どもの居場所という意味で、子どもは児童館には漫画を読みに行く。漫画は図書館としては不本意かも知れないが、きっかけがあれば子どもの図書館利用・読書行動につながるはずである。

日向会長

きっかけは大事であり、様々な入口があることが大事である。ただ、読む場所を図書館に限定する必要はないかもしれない。

松塚委員

私立中学や区内の高校も含めてアプローチをする方策も必要ではないか。

矢島委員

都立高校の図書館はあまり充実されていないようである。その学校のOBの支援で蔵書を整備したりすることもあるようだが、蔵書の充実は難しい。

日向会長

都立高校の図書館は狭いという印象がある。都立高校へのアプローチは、区としてはなかなか難しい面もある。ただ、区内の高校、在住の高校生には何かしらのアプローチについては、今もやっているとは思いますが事業として掲載するのも良いと思う

事務局

墨田川高校については、調べもの学習の支援も行っている。学校からのオーダーがあれば喜んで支援を行うが、ひきふね図書館からアプローチする機会は私立高校も含めてなかなか無い。今回のアンケートもお願いをしたが、返ってこない学校も多く、それぞれの学校の考え方の違いもあるのだと思う。

日向会長

高校生の不読率の高さは課題である。都の計画でも中高生の不読率について、都を挙げて改善したいという考えである。進路指導やキャリア支援の一環でもいいので、何かきっかけを見つけてアプローチができれば良いと思う。高校生を対象とした事業は、都と区でお見合いになってしまうことが多く、施策の隙間となることが多い。年齢的にも大人でもなく子どもでもなく、高校生に対する施策が漏れる原因である。

口中委員

中学生に来てもらって何か意見を聞く場はないか。

事務局

今はないが子ども司書の制度の中で意見を汲み取っていききたい。

口中委員

実際に来てもらって意見を聞く場があっても良いと思う。

事務局

学校司書をとおしても、中学生の声を拾っていききたい。

日向会長

時間も残り少ないので、図書館側で確認して欲しいところはないか。

事務局

各年代のポイントについて意見が欲しい。

日向会長

できれば「書店」というキーワードをどこかに掲載して欲しい。
本との出会いの場として「本屋さん」という位置づけを検討してほしい。

正岡委員

基本目標3の乳幼児のポイントで、「信頼感の醸成」という表現は「信頼感を醸成」のほうが良いのでは。

日向会長

事務局に検討をお願いする。

駒田委員

子ども司書の話は、どの程度具体的に区で議論に上がってきているか。来年度の教育課題に挙がるのかどうか。回答は今でなくても良いが、現在、教育課題にビブリオバトルが入っている。今後、新たな取り組みを教育課題として検討する際は、現在の取り組みを重ねての実施ではなく、一つ辞めて入れ替えるという形にしていきたい。重ねてとなると、学校現場で担うことに支障が出る。教育課題との整合について、図書館と指導室で調整をお願いしたい。

事務局

子ども司書については、まずは図書館の中での取り組みとして考えている。子ども司書の数が増えた暁には、学校にも声をかけていくことになるが、学校に何か事業を要請することは考えていない。まずは図書館で活躍してもらい、自信をつけてもらうことを目指したい。

日向会長

まずは図書館で子ども司書の養成・認定ということであるが、具体的なメニューについてはこの計画で規定するのではなく、各実施主体に委ねることも必要である。

■議事第4 その他

日向会長

次回日程について、開催日を7月27日とする。時間については10時とする。議題は特に配慮を要する子どもの施策の検討となる。資料2についても各自でご確認をお願いする。

以上で令和6年度第3回墨田区図書館運営協議会を閉会する。